

中世神話論

「苦しむ神」をめぐる

中村 真彩

卒業論文目次

はじめに

第一章 『神道集』とは

第一節 成立、系統、諸本

第二節 内容、書名

第三節 編者

第一項 安居院

第二項 安居院の活動

第二章 「苦しむ神」をめぐる考察

第一節 「苦しむ神」の研究史

第二節 権者と実者

第一項 『神道集』における権者と実者

第二項 実者の神の評価

第三項 「六道の苦」を与えられる意味

第三章 「苦しむ神」の思想的背景

第一節 古代から中世へ

第二節 本地垂迹思想

第四章 『神道集』の神々の苦悩

第一節 『長寛勘文』『熊野権現御垂迹縁起』

第二節 『神道集』『熊野縁起事』

第五章 東国の神々と唱導

第一節 東国の神々

第二節 唱導

第六章 中世の神と近世

第一節 中世の神

第二節 中世の神の展開

おわりに

注

参考文献・引用文献一覧

はじめに

「日本神話」と聞くと、『古事記』や『日本書紀』等の古代神話を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。しかし、中世日本にはそれとは異なる「神」の概念が存在した。『神道集』に登場する神々

の多くは、人として生を受け、想像を絶するような苦しみを経験し、死後に神となるという筋書きをたどる。なぜ後に神となるべき存在がそのような苦しみを与えられねばならなかったのだろうか。

『神道集』は、十四世紀半ば、天台宗の院家で唱導の名家だった安居院が、諸国の神社の縁起・由緒を書き記したものとされており、全十卷五十篇の中・短編作品によって構成される。これらの説話は、後に室町以後の絵巻・奈良絵本・丹緑本などへと展開するとともに、「曾我物語」や説教浄瑠璃の方向へと発展していく。本地物の代表ともいわれるこの作品は、中世の「神」観念を考えるうえで非常に価値のある資料である。これまで『神道集』に関して、筑土鈴寛氏をはじめとする多くの研究者が、構成や成立、その内容や意義についての研究を行ってきた。

本論文では、『神道集』を主たるテキストとし、『神道集』の神々の「苦しむ神」としての性格について述べ、その思想的背景を考察し、具体的な縁起から『神道集』の神々の苦悩についてまとめ、東国の神々と唱導の関係性について考察を行い、「苦しむ神」と近世との関係について、筆者自身の結論を導き出した。

第一章 『神道集』とは

『神道集』は中世後期の説話集であり、南北朝時代、後光厳天皇の文和・延文年間（一三五二～一三六一年）以後まもなくの成立とされている。内容は、諸国の神社の縁起・由緒を書き記したもので、

全十卷、五十篇の構成である。また、東国を舞台にした話が多いため、東国で成立されたと考えられている。筑土鈴寛氏はこれらの説話を、「神道論的なるもの」と「垂迹縁起的なるもの」に大別し、前者をさらに「玄義的なるもの」「形文篇的なるもの・神器・神宝の玄義的説明」「元初神・祖神の問題」「禁誡問題」と四分類し、後者を「物語的分子がなく、やや公式的縁起に近いもの」「所謂物語的縁起」と二分類している。「神道論的なるもの」は、神道の教義について論じたもので、「垂迹縁起的なるもの」は、神社の由来について説くものである。その中でも物語的縁起は、物語・説話的に神社の由来について説くもので、本地物の祖形とも言われる。現世で苦しんだ人々がのちに神となり、また神が仮に人の姿を借りて現世に顕われ現世の人々とともに苦しみを分かち合い、助け、やがて神となって去っていく、という過程を強調する内容となっている。

『神道集』の編者については、各巻頭に「安居院作」とあるため、安居院が作者または編者とされてきた。しかし、これ以外に安居院と『神道集』を結び付けるものは本文内にも他文献にも見つかからない。本論文においては編者の問題については詳しく触れないが、『神道集』に「安居院作」と記されていることから考えても、安居院は『神道集』編集に大きな関わりを持ち、それに安居院の名説教者と呼ばれた澄憲、聖覚が大きく寄与していたことは間違いないと考える。

名説教者であった安居院の唱導は、芸能的要素も加わり、民衆にとってさらに魅力的なものとなっていた。「神」が民衆と同じ「人」として生き、人としての苦悩を経験するという物語を耳にすること

は、当時の人々にとっておそらく初めての経験であった。しかし、このような物語を受け入れることができたのは、この説教の変容によつてであると考えられる。『神道集』が民衆にとつても親しみやすく、さらに心を打つような物語的要素を含んだものとなった理由はここにあるだろう。それと安居院の唱導活動は密接に関係していたのではないかと推測する。

第二章 「苦しむ神」をめぐる考察

最初に『神道集』を国文学の研究対象として取り上げ、その教理についての研究を試みたのは筑土鈴寛氏であった。次に、和辻哲郎氏は筑土氏による分類の中でもいわゆる「物語的縁起」の中の「熊野権現事」(二ノ六)の五衰殿から(中世の神)の基本的観念のひとつとして数えられることとなる、「苦しむ神」「悩める神」の観念を見出した。また、桜井好朗氏は、「熊野権現事」や「諏訪縁起事」の構成や内容から「人となつて苦しむ神」の性質を見出した。そして、『神道集』に取り込まれた熊野や諏訪の縁起がのちに本地物に転じたことに着目し、それには表現様式の変化だけではなく、神と人の関係の変化、すなわち神の観念の変動が見られると指摘した。その他、『神道集』の構成理念について研究した菊地良一氏や村上孝氏、田嶋一夫氏の論が有名である。

次に、『神道集』の権者と実者の問題について考えていく。権者とは「仏菩薩が衆生を救うために、仮に姿を現したもの」であり、

実者とは「悪鬼・悪霊がその身を現じて人を悩ますもの」を言う。『神道集』において「権者の神」と「実者の神」は常に対比的に描かれている。「神道由来之事」(一ノ一)では以下のような記述がある。

問、或人云、昆虫論云、一度と神ヲ禮、五百生蛇身報ヲ受、若爾ハ者、誰カ心有ラシ人神道ヲ可レ禮耶、答、神道有ニ權實一

實者ハ皆蛇鬼等アリ、權者ノ神往古ノ如來、深位ノ大士、教化六道ノ約束ニテ利益衆生ノ爲和光垂跡シテヲナリ、八相成道ノ終リテ論ス、尤可ニ歸依、但亦實者神ナリト云トモ、神顯マヘリ、利益非スレ無。後生利益ノ契リノ爲ニ禮ヲ作者、不レ可レ有ニ其失一

とある。これによれば「実者」は「蛇等」、「権者」は「往古如來、深位大士」であるとされている。また『神道集』では「蛇鬼等」である実者も神として認めている。

三熱苦ヲ權現・大菩薩ハ不レ可レ受レ之。其故何者、垂跡中ハ有ニ權者・實者一、佛菩薩ヲ化現シテハ權者ナリ、應化ニハ非、神道ノ以ニ實業ヲニ神明名得ルハ、是實者、佛菩薩ノ垂跡不レ可レ受レ之、實者此ヲ亦受ル

これは、神には「権現」「大明神」「大菩薩」があるが、明神のみが「三熱の苦」を受けねばならないのはなぜか、という問いに答えたものである。これによれば、権者は仏菩薩の垂迹であり、応化ではなく

神道の実業を以て神明の名を得たものが実者である。権者は仏菩薩の垂迹であるから「三熱の苦」を受けることはなく、実者は「神道の実業を以て神明の名を得る」ため、これを受けねばならないと示している。つまり、実者は神道の実業を受けることによって、権者の眷属となることが可能なのである。これは以下のように続く。

佛菩薩^ハ衆生利益爲^ニ、六道^ノ苦^ヲ受^ル事性多

つまり、「三熱ノ苦」を受けることがないとされた権者も娑婆世界においては苦しまねばならないと述べているのである。

『神道集』における神々の苦悩は、それを縁として衆生を救済するものであった。同じ苦悩を抱える人々を救うためには「六道の苦」を経験せねばならなかった。前章でも述べたように、人々は中世になつてはじめて、人としての苦悩を経験する神の存在を唱導を通して知ることとなる。その神々の苦悩が大きければ大きいほど、人々の心を打ち、また人々を救済するのである。

第三章 「苦しむ神」の思想的背景

平安時代末期は、釈迦の入滅後二千年が経ったことで、釈迦の教えは残っているが、仏法が人を悟りに導く力を失った時代と信じられ、世の中は大いに乱れていた。それゆえ「末法思想」はますます現実味を帯び、貴族や庶民の間に急速に広まっていった。そのとき、

仏が衆生を済度するために講じた策が、仮の姿をとつてこの世に仮現することだったのである。

仏・菩薩を本地とし、神を衆生済度のための垂迹とするという「本地垂迹説」が説かれるようになったのはこのころからである。これにより、古代の神の多くが中世では本地仏の垂迹と位置づけられるようになった。この二元性を構築し、中世になって神が民衆の前に姿を現したのは、衆生を仏法に結縁させるよう誘導し、神社で浄土の往生を祈願させることで浄土へと目を向けさせるためであった。中世において神は、衆生により近い存在へと変貌したのである。

また、『神道集』「神道由来之事」では神道の基礎的問題を追究しているが、ここでも神仏の一体性が語られており、本地垂迹思想が『神道集』の基盤となつていることがわかる。ここでは、「諸仏菩薩」の垂迹とは衆生を済度するために「和光他身」を示すことを意味し、垂迹は「鹿相極悪」である衆生のためのものであると語られている。ここで出てくる「和光」とは「和光同塵」とも言い、仏が衆生済度のためにその本地の智徳を隠して、塵に汚れた俗世に姿を現し、衆生と交わることである。「和光」とは「才智をかくして外に顕わさぬこと」の意から、「偉さを外に現わさない」という意味となる。また、「和光」は「権現」と同じように使われる。「権現」は、仏が衆生を教化するために仮に姿を人間界に現わすことであり、その出現した姿を指す。また、特定の菩薩・仏がこの世に現れた仮の姿として、「熊野権現」などの神の称号を指すこともある。様々な過ちを犯す衆生のために、神としてこの世に現れ、人として交わる。そ

の過程で苦難を経験する。つまり、権現の神こそ苦しむ神のことなのである。

人々は、自分の苦しみを理解し、肩代わりしてくれる神を、中世において初めて獲得した。民衆により近い存在として描かれた神の前生物語は、共感を生み、多くの民衆に支持されたのではないだろうか。

第四章 『神道集』の神々の苦惱

「熊野権現事」には、『神道集』とは異なる縁起が存在する。その中でも最も古いとされるのは、長寛元年（一一六三年）に成立した『長寛勘文』「熊野権現御垂迹縁起」である。その後も熊野縁起は形を変化させながら流布していった。『熊野旧記』や『私聚百因縁集』などにも「熊野権現御垂迹縁起」と同様の古縁起が認められる。『神道集』「熊野権現事」には、山中における貴子誕生譚をとりこんだ熊野縁起が収められている。

「熊野縁起事」は「熊野権現御垂迹縁起」の伝承と関係あるものと、のちの室町時代の草子の古態をなすものと二分類できる。「熊野権現御垂迹縁起」と「熊野権現事」の大きな違いは、「五葭殿女御物語」が挿入されている点である。『神道集』が神々の苦悩の物語を挿入したのは、これまでも述べてきたように、聴衆の心理を汲んだからであると考えられる。『神道集』には「熊野権現事」以外にも神々の苦悩を語る物語が複数ある。『神道集』の編著者はあえて神々

の苦悩を強調して描いていたと考えることができるのではないだろうか。

第五章 東国の神々と唱導

『神道集』に登場する神々の多くは、東国の神々であった。記紀神話に登場する神々は、大和王権の権力構造と密接に結びついており、支配・被支配の関係の中で序列化・身分化がなされていた。そのため、これらの神々は近畿圏や西日本を中心として語られていた。一方、『神道集』の神々はそれとは異なる位相を示していた。このことから、鹿嶋や香取、諏訪といった記紀神話に登場する神についての記述もあるが、その多くは神話の神統譜には現れない神であったということがわかる。

また、東国の物語が圧倒的に多いことから、『神道集』の編者は、意図的に神の物語を東国に集中させたと考えられる。『神道集』の編者といわれる安居院は東国を中心に活動していた。編者に関してはなおも論争が続けられているが、これが安居院作が定説となつていく理由のひとつである。

また、安居院は唱導活動を通じて苦しむ神々の物語を伝えていった。中世の本地物といわれる文芸や、寺社の縁起を説く宗教文芸が、御伽草子などの文学として定着し結集されるのは、熊野比丘尼や歩き巫女、勧進聖、先達、御師、神人、説経聖、修験者、絵解法師などの回国遊行の宗教芸能者たちが人々に神々の物語を伝え歩いたこ

とに始まる。こうした活動を通じ、神々の物語は中世の民衆に広まっていったのである。

中世の神々は僧徒たちの活動により古代的な世界から解放された。そして民衆もまた、はじめて自分たちの利益に直接つながる村落共同体の守護神・鎮守神を獲得したのである。民衆にこうした物語が伝わっていく過程で、より共感してくれる神々の性格が強調されていったと見てもよいだろう。

また、福田晃氏は『神道集』の土俗文芸性に着目して、「熊野権現事」をはじめとして「二所権現事」「三嶋之大明神事」「赤城大明神事」「伊香保大明神事」「八ヶ権現事」「諏訪縁起」等で山中における重なる苦難や死が語られていることに対し、「在地の縁起伝承は、山中に死者の他界を覗する、あるいは生命の復活転生を認める土俗的信仰儀礼の中で形成されたものであり、それ故にこそこの神々の事績は、在地の人びとに深い感動をもたらしたのである」と述べている（福田晃「神道集」久保田淳、北川忠彦編『中世の文学（日本文学史3）』有斐閣、一九七六年、一五五頁）。

『神道集』は在地の人々にとって非常になじみやすいものであった。成立が東国であったこと、また、その唱導の技術によって人々に支持されるようになった。「苦しむ神」の物語はこうして成立し、人々へと浸透していったのである。

第六章 中世の神と近世

「苦しむ神」という中世に新たに獲得した神の性格についてこれまで考察してきたが、佐藤弘夫氏が指摘するように、中世の神は他にも様々な性格を持っていた。古代から中世の流れの中で、神の性格は大きく変容した。こうした神の変容は、第三章でも述べたような思想的背景のもとでなされてきたのであり、これからも私たち人間の要請や営みの中で変化していくものであると考えられる。では、これらの中世的な神はどう展開していったのだろうか。

近世に入り、民衆はキリスト教という新たな宗教を獲得した。はじめは仏教の概念を用いて布教されたそれは人々の心を掴み、やがて弾圧されるようになっても信仰を貫く信者がいるほどであった。その後宗教統制がなされ、江戸時代には寺檀制度などが定められ、仏教は一面では保護されることとなった。こうした流れの中でも、近世において主流だったのは儒教である。儒教はしばしば神道と結びつき、宗教の組織化がなされた。また、儒教の倫理に基づいて士農工商の職業身分が確立していった。近世では、宗教の結びつきや民衆の生活形態などが著しく変化していった。

中世では仏教と深く結びついていた神道は、近世になり儒教との結びつきを強くした。しかし、近世の庶民信仰においてはさまざまな神仏がその霊験によって信仰されていたことも見逃すことはできない。七福神などの現世利益の神仏などがそうである。近世では民

衆レベルでそれぞれの利益に合った諸々の神々が信じられるようになり、記紀神話に出てくるような神々の他にも、より一層身近で利益のある神々も信仰するようになった。また、その一方で神々の物語は絵解きなどの形で広められ、中世末期には熊野比丘尼という女性の絵解きなどによっても伝えられてきた。「苦しむ神」は物語性を保ち、時にはより芸能化しながら民衆の中に広まっていったのである。

これらのことから私は以下のように考える。近世へと時代が移り、宗教の結びつきや民衆の生活形態などは大きく変化したが、民衆レベルでは神仏への信仰がなされ、多くの神仏が登場し、自らの利益に合った神仏を信仰するようになった。その一方で、「苦しむ神」の物語は、さらに物語性を増しながら人々の中に広まっていった。そして、それらの物語は形を少しずつ変えながら、現在に至るまで人々に親しまれていくこととなる。民衆は身近な神々を信仰するようになってからも、苦悩を経験し、肩代わりしてくれる神の存在も忘れることはなかった。中世の「苦しむ神」は形を変えながらも、今でも人々の共感を得、信仰され続けているのではないだろうか。

おわりに

『神道集』の魅力は、神々の前生での苦悩を描いているところにある。人間的な苦しみを経験しているがゆえに人々の共感を得、多くの人々の心を掴んだ。『神道集』研究はすでに多くの研究者によつ

て語られているところであり、今回はその論を整理しながら『神道集』の「苦しむ神」についての考察を行ってきた。近世以後の「苦しむ神」の発展については、少しなりとも自分なりの論が展開できなかったのではないかと考える。しかし、編者の問題について十分に検証できなかったことや、近世以後の「苦しむ神」の発展についての論が不十分であったことなどが反省点である。これらの研究を今後の課題としたい。

最後になりましたが、本論文を作成するにあたり、テーマ設定から論文の書き方まで、全てにおいてご指導いただいた指導教員の中村一基教授には厚く御礼申し上げます。

主な参考文献

- ・ 貴志正造編『神道集』平凡社、一九六七年
- ・ 神道大系編纂会編『神道大系文学編一 神道集』
- ・ 出淵智信「新訂「神道集」の研究」

精興社、一九八八年

ブイツーンリビューション、二〇一三年